

私の履歴書

川淵三郎

①

皆さんは「夢先生」を存じだろうか。

日本サッカー協会(JFA)は「このプロジェクト」

の一環として、選手や元選手に一日限りの先生になってもらっている。そんな彼、彼女らを夢先生、訪問先を「夢の教室」と呼んで、各地の教育委員会と連携しながら全国の小学校で開講している。

プロサッカーのJリーグは定着し、ワールドカップ(W杯)の常連にもなった。サッカーの普及という目的はある程度達したのではないか。そう思った時、競技力の向上以外に何か社会に恩返しできないか、フェアプレー精神や目

前に突き進む道歩む

小学校に生きた教本「夢先生」

的を持つことの大切さを未来を担う子供たちに伝える方法はないかと考えるようになった。暗中模索の中から「夢」という言葉を手がかりに、JFAの田嶋幸三専務理事や手

嶋秀人広報部長らがたどり着いたのがアスリートを生きた教本にすることだった。

昨年は一、二期で百四十

二回、受講児童は約四千六百

十一人の夢先生はサッカーだ

けに限らない。今年も水泳の

中村真衣さん、格闘家の高田

延彦さん、大リーガーの大家

友和さんらも登壇する。

現役時代は口下手に思えた

て何もしないよりは何かをし

選手が、教室の硬い雰囲気をはぐす話芸の持ち主だったりする。受講後の感想文を読むと生徒たちは甘美な成功物語より、挫折や失意から選手がどう立ち直ったかに心を揺さぶられていることが分かる。実体験に基づくと、こそ偽りのなさが強いインパクトを与えるのだと思う。

たった一日で何の役に立つ

という批判はある。僕たちも「安易に教育の場に出てくるな」というおしかりを受けるのではと真剣に悩んだ。が、一瞬の触れ合いの中でも何かを感じ取る能力が子供にはあるし、「そういえば昔、こんなことがあった」と懐かしく思い出してくれるだけでもやる価値はあると決断した。

振り返ると、リスクを恐れ

た方がまし、というのは僕の行動規範のようである。そこには名前につつまる母の一言が大きく影響している。

名前が示すとおり、僕は男

ばかりの三人兄弟の末っ子と

して生まれたのだが、子供の

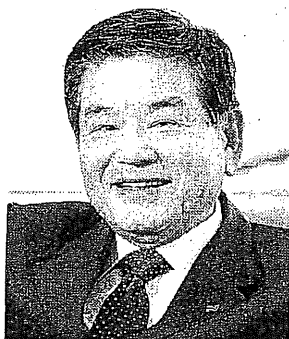
ころは三郎という名前があまり

好きではなかった。長兄の

た方がまし、というのは僕の行動規範のようである。そこには名前につつまる母の一言が大きく影響している。

名前が示すとおり、僕は男

言は後々の僕の人生行路を定めた気さえする。何か難局に直面するたびに「どうせおれの人生、一か八かだから」と独りごち、現状維持や後退よりも、前のめりに突き進む道を選んできたからだ。



最近の筆者

名前が示すとおり、僕は男ばかりの三人兄弟の末っ子として生まれたのだが、子供のころは三郎という名前があまり好きではなかった。長兄の

名前に関してはJリーグをスタートさせた一九九三年ごろ、野末陳平さんに「川淵三郎というのはたかさんの人に助けられながら、大きな仕事を成す名前」と言われた。後段はともかく、これまでたかさんの人に助けられてきたことは間違いない。

義明、次兄の邦彦に比べて親の手抜きのようなものを感じていたのだ。そんな愚痴を聞かされていた母の淑子が小学生の僕にある日、言った。

僕の人生には、僕の一か八かの決断を、必ず支えてくれる人がいた。これまで照れくさくて言えなかったが、そんな方々への感謝の念を込めて本稿をつづりたいと思う。

「この間、姓名判断の先生に見てもらったら、三郎は一か八かの面白い人生を歩む名前らしいよ」

僕を励まそうとしたこの一

僕を励まそうとしたこの一

(日本サッカー協会会長)

僕を励まそうとしたこの一

題字も筆者

僕を励まそうとしたこの一

題字も筆者

私の履歴書

川淵三郎

②

明治三十四年(一九〇一年)生まれの父、真一は福徳生命で働きながら関大専門部経済学科を卒業。電話局に勤めていた一ツ下の村田淑子と二十

七歳で見合い結婚した。父は大阪、母は奈良の出で、母の父が警察官として殉職したのが目を引くぐらいの、ごく平凡な家同士の結婚だった。

新婚時代は大阪市内の森ノ宮で過ごし、長兄義明、次兄邦彦をもつた。泳ぎが大好きな父は海の近くで暮らすのが夢だったらしい。それで大阪湾に臨む高石町(現高石市)高師浜に引っ越した。昭和十一年(一九三六年)十二月三日、そこで僕は生まれた。

スポーツ好きの血は父から受け継いだようだ。剣道と柔道の有段者で家には野球のグローブ、テニスのラケットもあった。上の兄をスケートに連れて行ったはいいが、滑れ

父から血を受け継ぐ

明るい性分や字は母譲り

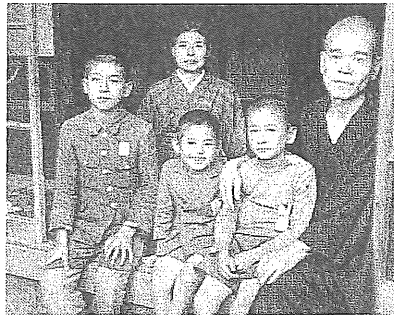
なくてわんわん泣く兄を放置して夢中でリンクを周回するような人だったらしい。

らしい、と言いたのは理由がある。僕はそういう父のスポーツ好きの陽気な側面をセピア色の写真や伝聞でしか知らないからだ。

陸軍に召集された父は十二年八月から中国各地を転戦する。物心がついたころには家にいなかった。初めて父に会い

った記憶は信太山(現大阪府和泉市)の練兵場を母と訪ねた時のもの。父が面会室に入ってくる、幼い僕は怖くて机の下に潜り込んでしまった。恐る恐る顔を見上げると、父は「三郎は(横綱)双葉山にそっくりだ」と優しく抱きかかえてくれた。

が吹けるようになった僕が父の帰りを待って喜び勇んで演奏すると「やるからにはフリース・アドラーぐらいにならない」と。米国の有名な演奏家だったが、当時の僕には誰のことかもわからない。



両親と一緒に(前列中央が筆者)

学校の先生になったものの結核を患ったのを機に辞め、一人で設計図を書き写す仕事をするようになった。関大出の次兄は大阪の奥村組土木興業で役員になったけれど六十歳の若さで逝った。父、母、長兄もすでに亡い。

偏屈な父も晩年は好々爺になった。が、父を愛えた戦争中の話は結局聞かずに終わった。

ラジオが台風の接近を告げる夏の夜、会社から帰ってきた父が有無を言わず幼い僕を海へ連れていったことがある。そして「泳ぐぞ」。夜の海

父不在の家を母は病院で働きながら支えた。明るい性分や字を書くのが好きなのは母譲りだと思つ。夏休みには六人兄弟の母の親せきがどつと海水浴に押し寄せ、家をにぎやかにしてくれた。兄弟仲も良かった。ちなみに長兄は天王寺師範を出て小(日本サッカー協会会長)

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

③

川淵三郎

僕は「海の子」だ。小学校から帰ると母が紫に染めた六尺フンドシを締め、歩いてすぐの高師浜に素足で直行。

防波堤の内側に漁網を乾かす白砂の広場があり、泳ぐことに飽きるとそこが野球場に早変わり。素潜りしながらハマゲリを足の指でつまんで採ったり、漁師の息子から船の櫓のこ

小学校の演劇部

ぎ方も教わった。

今は工業地帯となって見る影もないが、当時の高師浜は松林の中に船場の本店や実業家の邸宅が点在する霽囲気のある別荘地だった。ええこのぼんぼんと古くからいる漁師や農家の子供、そして僕のように越してきた子供が机を

「物おじせず」教わる

理想の父親像を重ねた先生

と恐れられていたが、演劇部員には優しくかった。舞台でやる演目は放課後の教室でけいこし、その後、さらに先生の自宅でNHKの放送劇の練習をやるのが常だった。当時のラジオ番組は生放送で編集は不可能だったから練習にはたっぷり時間を割いた。発声やら何やら二年間、基礎をみっちりたたき込まれた。

の出会いだ。放送劇の脚本などを書いて既に有名人だった先生が高石小学校に赴任してきたのは僕が四年生の春。早速、読み書きがしっかりできる生徒を十人ほど選び、NHKラジオの放送劇に出演させた。そのメンバーに入った僕は有頂天になり、五年生になって先生が演劇部を立ち上げるとすぐに入部した。担任の児童には「ライオン」

先生が書く芝居で僕の役名は三郎、役柄はやんちゃ坊主と決まっていた、そのまま「海の子」という作品もあった。アラビアンナイト風の「不思議な地図」で頭に巻いた紫のターバンは実は僕の六尺フンドシ。NHKのコンクールで優勝した「バリカンの来る日」は先生の代表作となり教科書にも載った。その記念公演を大阪・馬場

町のNHKのスタジオでやった時。机に載せたイスの上から先生が来るのを実況する場面では僕は足を踏み外し、二メートルの高さから転げ落ちた。痛みをこらえるべきか迷い、とっさに「痛えー」。幕引き後、台本にないセリフを叫んだ僕を先生は「ぶっちゃん、一度は必ず先生を困らせた。芝居の面白さを教えてくれた先生だが、「自分の人生は自分でしっかり考えなさい」が口癖で「プロの役者を目指せ」などと決して言わなかった。ある映画の出演話を教育上問題があると言って断ったりする硬骨漢だった。



今、僕は家（日本サッカー協会会長）で話している。先生、目とお父さん、三マイク外して「よ」と娘にかからかわれる。小先生が大きいのも人前で物おじせず話せるのも先生の薫陶のおかげだ。五年生の時、卒業式の送辞を丸暗記してやれと言われ、六年生で高石小の初代児童会長になることも後押ししてくれた。先生といふ時間は父より長かった。僕は先生に理想の父親像を重ねていたのだと思う。

（日本サッカー協会会長）

私の履歴書

川淵 三郎

④

で、どんな打球もアウトにする
と恐れられていた。後に立
教大に進んで一学年上の本屋
敷錦吾さん、長嶋茂雄さん、
杉浦忠さんらと黄金時代を築
くことになる。

ばない気がした。それで進学
校の三国丘高を選んだ。松本
と小林が五四年春の選抜と夏
の甲子園に連続で出た時はさ
すがにうらやましかった。

三国丘高は野球よりサッカー
の方が強かった。僕が入学

っていた。もともと、同じ一
年の夏休みに高石中OBで野
球チームを結成、こちらは東
海北陸近畿予選を勝ち抜いて
東京・後楽園球場での警察主
催の全国大会に出た。松本た
ちももちろん一緒だ。

吉岡たすく先生との演劇活
動は高校二年まで続いた。昭
和二十六年（一九五一年）に
民間放送局ができるというラジ
オ

イットのようなものだった。
演劇に割く時間が減ると
反比例してスポーツ、特に野
球をやる機会が増えた。

劇も増えて余計に忙
しくなった。ただ、
このころには録音テ
ープの普及で生放送
でなくなり、僕らの
技量も上がったから
スタジオに集まって
その場で先生に役を
割り振られ、さっと
練習して収録ということが当
たり前になった。

この二人と高石中学校で一
緒になり、三年生になる前に
「最後の年に最強チームを作
りたい。ぶっちゃちゃんも入っ
てくれ」と誘われた。それでに

わが野球部員になった。打順
は二番、ポジションはセカン
ド。大阪府の準硬式の大会で
決勝まで進み、難波球場で天
下茶屋中に惜敗した。

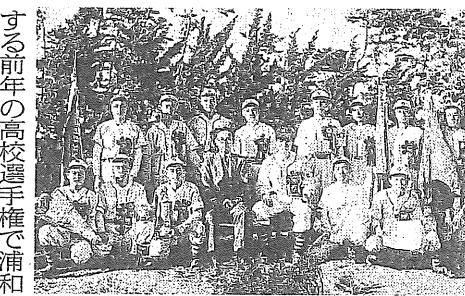
ひと夏にサッカーで四
国、野球で東京へ。そう
やって掛け持ちをエンジ
ョイしても誰もとがめな
い、おおらかというか、
いい時代だった。

部一カサ校高

「四国遠征」につられる 野球や演劇と掛け持ちで

そんな野球仲間松本幹宏
がいて、コントロールは悪い
けれどすごいドロップを投げ
た。はだして野球をやる子供
もいた時代に彼はスパイクを
履いていた。隣の羽衣小で有
名だったのが小林勲。遊撃手

わが野球部員になった。打順
は二番、ポジションはセカン
ド。大阪府の準硬式の大会で
決勝まで進み、難波球場で天
下茶屋中に惜敗した。



中学では野球部に所属
(前列左端が筆者)

もともと僕は何か一つ
のことを根を詰めてやる
のが苦手なタイプ。さぼ
り上手というか、野球が
嫌になると演劇を、演劇
が嫌になるとサッカー
を、サッカーが嫌になると演
劇の練習を口実にさぼって
いた。そつやって好きなもの
間を気ままに行き来してい
た。「おまえはサブプロウじ
ゃなくて、サブロウだ」とか
わかれたものだ。

先生が全員に預金通帳を作
ってくれていて、出演料は小
学校の卒業時にまとめてもら
った。高石中学に通つよつに
なるとその場で現金を渡され
た。決して裕福ではなかった
僕にとつて効率のいいアルバ

そんな野球仲間松本幹宏
がいて、コントロールは悪い
けれどすごいドロップを投げ
た。はだして野球をやる子供
もいた時代に彼はスパイクを
履いていた。隣の羽衣小で有
名だったのが小林勲。遊撃手

わが野球部員になった。打順
は二番、ポジションはセカン
ド。大阪府の準硬式の大会で
決勝まで進み、難波球場で天
下茶屋中に惜敗した。

する前年の高校選手権で浦和
高に次いで準優勝の実績があ
った。「サッカー部に入っ
たら夏休みに四国に行ける」と
いう甘言につられ入部した。
旅行するにもコメ持参とい
うものない時代、四国は僕にと
つて海外旅行に似た響きを持

た。もともと、同じ一
年の夏休みに高石中OBで野
球チームを結成、こちらは東
海北陸近畿予選を勝ち抜いて
東京・後楽園球場での警察主
催の全国大会に出た。松本た
ちももちろん一緒だ。

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵三郎

⑤

「学生時代に戻れるとしたらどこがいい」と聞かれたら、僕は「三国丘の時代」とためらうことなくいえる。

文武両道
文武両道を絵に描いたような高校だった。僕がいた間も七つくらい運動部が全国大会に出たと記憶する。

同級生の松浦賢、戸堂博之、中村靖之介らがいた硬式テニス部は全国制覇し、松浦は後にデビスカップ代表にもなった。運動能力は随一とうたわれたバスケットボール部の東嘉伸は大学でハンドボールに転向して日本代表となり、五輪代表コーチを務めた。

「文」も多士済々。朝日新聞に入った富岡隆夫は在学中から「おれは雑誌の編集長に

なる」と言い、本当にAERAの初代編集長になった。演劇部にいた土生重次(故人)は俳句で名を成し、美術部と卓球部に所属していた中辻悦子は夫の元永定正さんとも

部員11人、OBは倍

うれしかった「超高校級FW」

に画家として国際的に活躍中だ。授業をさぼってテニスに興じた相手が先生だったとか、今ではあり得ないおらかな校風の下、みんな自分のやりたいことに浸った。

サッカー部に入った僕は目的の四国旅行を果たし、二期には退部するつもりでいた。当時のサッカーのイメージを一言で表すと「痛い」。ボールは重く、いびつな球体

だった。ボールに革のひもの結び目があって、ヘディングでそこを直撃すると雨の日はめりこむような激痛が走る。金輪際御免という感じだ。

「気管支が弱いんで激しいスポーツはやるな」と医者が言ったとうそをつき、退部を申し出た僕に、先輩は「部員が十一人切ると試合がでけへん」と悲しげにいう。高圧的

な相手には刃向かう性分の僕も、こつこつアプローチには弱い。ずるずる続けることになった。

練習はきつかった。OBが入り代わり立ち代わりやってきては、しごいて帰る。すると足の速さも手伝ってめきめき上達、どんどんサッカーのとりこになり、三年になるとついに演劇を辞めた。地獄だったのは三年春の藤

井寺合宿。後の日本代表の検見川合宿より僕にはきつかった。部員は十一人しかないのにOBはその倍近くいた。二人で一人を見張っている勘定で手が抜けない。OBとい

つても現役の大学生がほとんど。中心が関学OBだった中



高校時代 (中央が筆者)

井幸雄さんと、姿を現すと僕は「鬼が来た」と震え上がった。大経大の福田克己さんは日本学生代表、平林俊次さんは早大主将で、そんな先輩に鍛えられた自信がその後のサッカー人生の支えになった。

環境は劣悪だった。ボールは三個くらいしかなく、ドリ

ブル練習なんかろくにできない。走力と持久力を鍛え、大きな円陣をつくってボールをけり合ったり、後はOBとの紅白戦。

困ったのがシューズの補修だ。神戸に専門店があり一足三千円はしたと思う。普通は三月月ぐらいでダメになるのを、なだめすかして一年はもたせる。革製のポイントはすべにちびてしまう。お金がないから革を三層に重ねて手製のポイントを作り、トンカチとクギを使って自分で取り換えた。しよせんは素人だ。クギが靴底から突き上げて、足に穴が開いたりした。

そんな苦労が突つて最後の冬、昭和三十年(一九五五年)の第三十三回全国選手権に出場できた。ベスト8で熊本工に敗れたが、毎日新聞の総評で元日本代表の岩谷俊夫さんに「超高校級FW」と書かれたのはすごくうれしかった。

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵 三郎

⑥

最後の全国選手権が終わった後、関大サッカー部の岩田淳三将から「うちに来ないか」と誘われた。そのころは家計の負担を考えて国公立志望だったので断った。阪大に落ちて、浪人暮らしが始まった。といっても、授業料も電車代もかかるので予備校には通わず。家でろくに勉強もせず母校の三國丘高に通い詰め、後輩とボールを遊んでいた。必然の二浪突入。

それでも懲りずに後輩とサッカーさんまい。変わったのは家と母校の往復から、サッカー部同級生の津田和成の自宅が加わって、動線が三角形になったことくらい。

船乗り志望の津田は一浪の後、函館にある北大水産学部に入学した。その留守宅に僕は転がり込んだ。津田には姉と二人の兄がいて、上を「大兄ちゃん」、下を「小兄ちゃん」と呼ぶ僕を二人は弟のように遇してくれた。小兄ちゃん

の和明さんも三國丘OBで当時は阪大生。後に寿屋（現サントリー）に入社し、僕が妻と出会うきっかけも間接的に作ってくれたのだが、当時はサントリーの副社長や関西経済同友会代表幹事になるなんて夢にも思わなかった。

1年から即レギュラー

日の丸付け戦う時 間近に

おかげで浪人二年目も勉強はさっぱりだったが、後輩たちは全国大会に出られ、僕の体調も最高に良かった。それが生きたのが都市対抗サッカーまつ。いくら家が裕福で息子

の親友とはいえ、津田のお母さんは練習で腹をすかせた僕に高価なハムとか栄養のあるものをいっぱい食べさせてくれた。

工業の川本さんとは公私ともに付き合いがあり、「あいつを早稲田にどうか」と推薦してくれた。川本さんは早大サッカー部の顔だし、とんとん拍子で話はまとまった。

昭和三十三年（一九五七年）四月、僕は早大第三商学部に入

った。朝日新聞に入った齋田隆史さんは合宿にクラシックのレコードを持ち込んで陶然と聞き入っていた。ほかの大学は下級生が先輩の荷物持ちや軍隊じみたあいさつをさせられていたから、「ワセゲでよかった」としみじみ思った。

へ大早後浪2

浪人暮らしが始まった。といっても、授業料も電車代もかかるので予備校には通わず。家でろくに勉強もせず母校の三國丘高に通い詰め、後輩とボールを遊んでいた。必然の二浪突入。

「大坂府予選。三國丘OBは決勝で大阪クラブと対戦、0-1で敗れたものの僕は大きい気を吐いた。大阪クラブにはベルリン五輪代表の川本泰勝らがいる。当時の早大サッカー部はリベラルで先輩が先輩面しない。寮の同部屋は主将の八重樫茂生さんだったが、部屋をいつも掃除するのはきれいなきの八重樫さん。練習も率先と導く扉が開かれようとしていた。

今でも思い出すと、さすがの僕も顔から汗が噴き出てし

一年から即レギュラーになった僕は、東西大学主催の決定戦を関学と戦って2-0で勝った。1点を決めた。浪人中



（左端）場列アマ、練習後、見列チェ、伏筆現、東大、大列右、早大時代、（中列）は鬼武健と戦った。浪人中

（日本サッカー協会会長）

私の履歴書

川淵三郎

①

昭和三十三年(一九五八年)

に東京で開かれたアジア大会で日本はまさかの二連敗、グループリーグで敗退した。幸か不幸か、選考会合を肉離れで離脱した僕は代表の選から漏れていた。

クラマーさん

敗報に衝撃を受け、た日本サッカー協会は新旧交代に乗り出し、FWに僕や二宮

真、渡辺正らを登用、監督も僕に目をつけた川本泰三さんから竹腰重丸さんに代えた。しかし翌年のローマ五輪予選も韓国に1勝1敗の得失点差で及ばず、ホストとなる東京五輪に向け、抜本的な強化の見直しを迫られた。

そこで着手したのが約五十日間の欧州遠征とドイツ協会

へのコーチ派遣要請。前者はローマ五輪のさなかの六〇年夏、早大四年の僕も参加してデュイスブルクで始まった。そこに現れたのがドイツ協会

が送り込んだデットマール・ラインからハーフラインまで

度肝抜かれた「大和魂」

理論と実践、同時に示す「父」

クラマーさん。後年、皇帝フランツ・ベッケンバウアーに請われバイエルン・ミュンヘンを率い、欧州王者にもなった名将。いまだに、なぜあれほどの人が日本人を教えに来たのかよくわからない。

ドイツに着いて最初の試合でアマチュアチームに0-5で負けた。クラマーさんは会うなり僕らに言った。「君ら

に大和魂はないのか」。度肝

を抜かれた。第二次大戦中は落下傘兵として戦い、レニングラードで捕虜になった経験を持つクラマーさんはこの時三十五歳。眼光鋭く、僕らが知らない「残心」なんて武道具用語まで知っていた。

それからは驚きの連続だった。初めてボールリフティングなるものを教わり、ゴールラインからハーフラインまで

一回も落とさずに行けと指示され、できたのは継谷昌三らごく少数。僕らの技術のほとんどが自己流に過ぎないことを思い知らされた。

当時の日本人コーチは「正確にけれ」と怒るけれど「で

は、どうしたら」を教えられた人はわずかだった。クラマーさんは理論と実践を同時に示せる人だった。ぼんと胸を突き出してボールを止めるト

ップを教わった。野球のボールを曲がったバットで打つかい？ インステップキックも同じだよ、足首を一直線に固定してボールにかぶせるようにけりなさい……。

当時の日本にも、関学の李昌碩さんのような技巧派はい



＝提供 川本泰三さんとクラマーさんの写真

然、電話があった。僕もちいさい時から知

息子が亡くなったという。五十二歳だった。慰めの言葉が見つからなかった。僕は後で手紙を

書いた。「あなたは日本サッカーの父、そして息子はまだ日本にもいます。長沼(健)、岡野(俊一郎)、平木(隆二)、私、そして東京、メキシコ五輪のメンバーたち。だから寂しくなったらいつでも日本の息子たちに会いに来て下さい」

基礎技術が身に付くとパス・アンド・ランやミート・ザ

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵 三郎

⑧

予選免除の東京五輪（一九六四年）に向けた日本サッカー協会の強化策は極めてシンプルだった。代表チームを常設軍とし、資本を集めて中的に投下する。五輪が近づくと候補選手を千葉・検見川の合宿所に集め、会社にはそこから通わせ

輪五東京近づく

た。六一年に古河電工に入社した僕もそうだった。

海外遠征も頻繁。五輪の強化費が増えたにせよ、サッカー協会がすごいと思うのは五八年当時から遠征の自己負担がゼロだったことだ。

行く先は東南アジアやソ連、東欧と相場は決まっていた。日本初の国際サッカー連盟理事である市田左右一さん

が東南アジア方面に異常に強く、五八年から毎年のように出かけたマレーシアでは当時のトंक・アブドル・ラーマ

ソ連訪れ力の差痛感

競争激化、怪物「釜本」が登場

本は「ソ連の交流が密だったのは毎年、新聞の後援で日ソ親善試合が行われていた関係と米ドルが貴重で、こちらも使

いがあったからだ。僕が初めてソ連を訪れたのは六〇年九月。トルペド・モスクワに〇―８で一方向的にたきのめされた。それでもお

客さんが帰らなかつたのは、洗濯機が当たる抽選が試合後にあったからだと後で聞かされた。モスクワ滞在中、亡命した女優の岡田嘉子さんがチームの宿舎を訪ねてきて、年配の役員たちが妙にそわそわしていたのもおかしくな

った。当時のソ連はいろんな意味で遠い国だった。横浜港を出て津軽海峡で船酔いに見舞わ

れながらナホトカに到着。そこから列車、飛行機を乗り継いでハバロフスク経由でモスクワ入り。ある町で黒パンだ

と思つて手を伸ばしたら表面の黒さは全部ハエがとまっていたからだったとか、この手の話は山ほどある。

それでも欧州に行ける者はまだ良かった。代表候補はいつしかA、Bチームに分けられ、Aは欧州、Bは東南アジ

アと遠征先の差別化も進んでいた。メンバーが新聞紙上で発表されるまで、当落線上の僕は心配でならなかつた。特に六二年に脊椎分離症に襲われてからはサッカーをやめようかと思つほど追いつめられた。最初に行った病院で

ももたらした。六三年十月のプレ五輪で秩父宮ラグビー場に皇太子殿下をお迎えし、ドイツと試合をした際、僕は主将とはいえず学生主体のBチームにいた。



皇太子と正妃陛下（現在の天皇陛下）が東京五輪に向けて、左は渡辺寛一、右は二宮レギュラーは当初、右は二宮寛一、真ん中は快足・杉山隆一が出現。東京五輪の年にさらなる怪物が現れた。二月の東南アジア遠征から加わり、五輪直前

はすぐに手術といわれ、次の大学病院では疲れがとれば治るといわれた。結局、患部が燃えるように熱くなる痛み止めを腰に塗ってだましましたし練習を続けた。塗つてから三十分ぐらいすると体が動くようになるが、二時間もすると痛くて動けない。腰の痛みは太もものしびれ

（日本サッカー協会会長）

私の履歴書

⑨

川淵三郎

釜本邦茂は選手の誰が見ても将来の逸材だった。釜本がセンターフォワードに座ることでは僕は右ウィングへ押し出された。そこでポジションを争うことになったのが宮本輝紀だった。技術はどれをとっても一級品。

胸躍る五輪

「南部牛」と称されたタフな八重樫茂生さんや釜本とともに、今のJリーグでも楽々やれると思う選手の一人だ。

競争相手が試合に出ていると「ミスしないかな」と願うのは選手の性だが、宮本は本当にミスをしない。彼に勝つにはどうすればいいか目を凝らし、引き技を交えた柔らかいタッチを自分のものになれないかと必死になった。最終

的に適性を考え宮本は中盤に下がったが、全ポジションで繰り広げられたこうした競争がチームのレベルアップにつながったのは確かだろう。腰痛が一時的に治まった僕

にじんと響いた。

初戦先発で「やばい」

シューズの手入れ怠け滑る

一九六四年十月十日の開会式にはもちろん参加した。格式張った式典が苦手で大学の入学式や卒業式は欠席した僕もこの日ばかりは勝手は許されない。国立競技場の外で入場行進の練習も一時間以上やらされた。しかし、マラソングートをくぐって大歓声を全身に浴びた時は、さすがに胸

退場もない。先発の持つ意味は今と比べものにならないほど大きかった。メンバーを決める長沼監督、岡野コーチ、クラマーさんは大変だったと思う。

僕は右ウィング、中央に釜本、左ウィングが杉山隆一という攻撃陣。試合が始まるとすぐ「これは提督メダ」と思う。スパイクのポイントがちびいて、駒沢競技場の芝生にまったくひっかからない、つるつる滑るのだ。



選手村でシューズを愛用していた。クラマーさんはよく僕らに「サッカーシューズは大事に手入れしろ。刀を磨かない武士はいないだろう。それは魂なんだから」

が「これでオリンピックに出られる」と思ったのは本当に五輪直前、最後の仕上げとして七月から九月まで出かけた欧州で全日程を終えた後だった。最後の4試合をすべて先発し2得点をマーク、はっきりと手心えをつかんだ。生まれた国で夏の五輪が開催される機会は一生涯に一度あるかなにかだから本当にラッキーだと思った。

選手村は代々木の米軍施設を転用したもので、長沼健監督、岡野俊一郎コーチと十九人の選手は一軒家に四、五人ずつ分散し寝泊まりした。日本にもこんなところがあるのかと思うような豪華さで食事はおいしいし、無料の床屋はいつ行っても満員だった。

十四日の日本の初戦の相手はアルゼンチンだった。当時は、ルールに選手交代も警告、

「このままでは魂のない侍になってしまう。」(日本サッカー協会会長)

は、ルールに選手交代も警告、

は、ルールに選手交代も警告、

は、ルールに選手交代も警告、

私の履歴書

川淵三郎

選手交代ができる今のルールなら、即刻ベンチに下げられたらどう。それほどひどい出来だった。初戦の緊張だとか、相手が強豪アルゼンチンだとか、うまくいかない理由はほかにもあったのかも知れないのに全部がシューズのせいに思えた。これを履いている限りはダメだと。

前半は0-1で折り返した。後半九分、杉山隆一が鮮やかなドリブルで二人抜いて同点シュート。しかし十七分に再びリードを許す。この後、汚名返上のチャンスが訪れた。三十六分、釜本邦茂が左サイドから上げたクロスに地面にはうように頭から飛び込

み、ダイビングヘッドの同点弾を決めたのだ。流れは大きく日本に傾いた。その一分後に僕のアシストで小城得達が勝ち越しゴール。日本サッカーが五輪で勝

同点弾決め流れ呼ぶ

メキシコの「銅」につながる

つのは一九三六年にスウェーデンに逆転勝ちした「ベルリンの奇跡」以来だった。

人間は不思議な生き物だ。つくづく思う。同点弾の後の僕は好プレーを連発。杉山と宮本輝紀に決定機をお膳立てした。シューズのことなんか気にもならない。それまでの

自責の念もどこへやら。二日後のガーナ戦で先発から外れると「終盤に持ち直した姿こ

そ真のオレなのに」とベンチの決定が不満だった。まあ、前半の出来からすれば、第二戦は外されても仕方なかった。日本はガーナに2-3で敗れたが、同組のイタリヤにプロ選手がいることが発覚し参加できなくなったため、日本は一勝一敗でベスト8に進むことができた。十八日のチエコスロバキア

ままメキシコの主力に育った。東京ではまだ若かったチームが四年の歳月をかけてさらに熟成したわけである。

代表を少数精鋭の常設軍にして集中強化するのは細長い塔を建てるようなものだ。底

計画でメダルをとったことを称賛すべきだと思う。長期の海外遠征といい数々の新機軸を打ち出した当時の野津謙・日本サッカー協会会長は本当に国際人だったと思う。

ユーゴ戦後、クラマーさんに「これでサッカーをやめます」と告げた。五輪の思い出もできたし、いつ腰痛が再発するとも限らない。いい区切りだと思っただが、懇々と君にはこれから後輩に伝える仕事がある」と諭され、

アルゼンチンに勝って釜本と抱き合う（左から二人目）



アルゼンチンに勝って釜本と抱き合う（左から二人目）

との方々決勝は再び先発したが0-4で完敗。後に日本代表監督になるイビチャ・オシムがいたユーゴスラビアとの順位決定戦も先発したが、1-6で大敗した。

東京での経験は四年後のメキシコ五輪銅メダルにつながった。杉山、釜本、宮本、小城、横山謙三、片山洋、山口芳忠、鎌田光夫、森孝慈、渡辺正といったメンバーはその

「これを今までのこととはすべて忘れて新しい目標に向かおう」として翌日からまた厳しい練習が始まった。（日本サッカー協会会長）

「アルゼンチンに勝った後、たくさん友人が来ただろう。でも試合に負けた今日来てくれる人こそが本当の友人だ」「これまでのことはすべて忘れて新しい目標に向かおう」として翌日からまた厳しい練習が始まった。

練習が始まった。（日本サッカー協会会長）

私の履歴書

川淵三郎

⑩

時計の針を少し戻そう。浪人時代。高石町の町長選挙があつて現職對抗馬の手伝いをした。南海電鉄羽衣駅前で候補者の名前を連呼する僕の前を、羽衣学園の女生徒が通りかかった。セラー服姿のなかに長身でひときわ目立つ子がいた。楚々としたたずまい。心臓をわしづかみにされたような衝撃をおぼえた。その後、一度見かけたが、それきりだった。

翌年の夏、慶大に進んだ高校の友人、池尾保夫が「今、夏休みで家にいるから来いよ」といので、池尾家の大邸宅を訪れた。彼のアルバムを何気なく見ていてびっくりした。あの子がいる、胸の

高鳴りを抑え「この子、誰？」と尋ねた。淡野康子。いとこだよ、おれの」。名前を聞きだすのが精いっぱいだった。大学二年の夏休みから帰省の度に大阪・淀屋橋の寿屋(現

合宿抜けだし結婚式

翌日の試合で「花嫁に土産」

た。翌日からバイトに通う電車が全く違うものになった。「高嶺の花」とひそかな想いで見ていたが、夏休みが終わりに近づくとつれやるせない気持ちになった。もう二度と会えなくなるんじゃないかと。一大決心した。難波で地下鉄御堂筋線に乗り換える途中で声をかけた。「あの一、淡野さんでし

よ」。びっくりする彼女に「池尾の高校の同級生です」と名乗った。それを聞いて彼女は安心したらしい。会社が何時にかわれたかと思ったそらだ。それから遠距離恋愛が始まった。手紙は頻りにやりとりした。僕が初めて見かけたとき、彼女は高校一年生で羽衣駅近くに住まいがあり、卒業後は叔父が嘱託医をしている会社で働いていたことが分かった。古河電工に入り、試合で地方に行く帰り道は大阪に



新婚時代、妻の康子と

に戻る前日、それでもあきらめきれず勇気を奮い起こして先頭車両に行った。すると彼女から「この前はすみませんでした」。職場の先輩に「少し遅れて行った方がいい」とアドバイスされ、六時四十五分に着いた。私がないのでかまそを抜けたでして結婚式をすませ、午後六時の飛行機で引き返し、翌日のディナモ・モスクワ戦に出場した。二対二で引き分けたが、名キーパーのヤシンから一点を取った。記者から「花嫁に良い土産になりますね」と言われ「ああ、そういう言い方をすればいいのか」と思った。式の前日、父にモーニングを着るよう母から頼んでもらったが「それなら出ない」と言い張る。兄たちも加勢してくれたが、頑として聞き入れず最後はあきらめた。この辺の強情さは間違いない僕も受け継いでいる。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

⑫

川 淵 三 郎

一九六四年十月二十五日、東京でクラマーさんの送別会を開いた。そこで彼は優秀な指導者の育成とコーチ制度の確立、芝生のグラウンドの確保、そしてリーグ戦形式の大会の導入が日本サッカーの発展に不可欠だと提案した。

僕の社会人生活はそれより

お客さん扱いに不満

寮生活は充実、仲間を育む

当時の主要大会は天皇杯を筆頭に短期間のノックアウト方式で争っていた。これでは年間の試合数が少なすぎて強化にならない。クラマーさんの指摘を受け、他の競技に先駆けて創設されたのが日本リーグである。同年十二月二十五日の設立準備委員会には古河、三菱重工、日立、八幡製鉄、東洋工業の代表者が集まった。さ

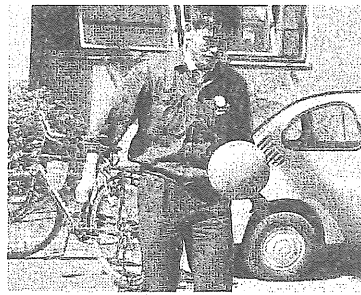
早く、六一年に古河に入っていた。日立、三菱、東洋工業からも誘われたが、早大時代から慕う八重樫茂生さんの存在が決め手になった。監督兼選手の長沼健さんに平木隆三さん、内野正雄さんと日本代表の先輩も多かった。

当時の古河に入るのには相当な難関だったが、宮本征勝と僕は筆記試験など一切免除。人事担当常務の斑目巨一さん

との面接だけで採用された。当時の小泉幸久社長はアイスホッケー、サッカーなどを四大社技に指定、大卒の有望選手を続々採用していた。その流れに乗れたのである。

入社一年目は横浜電線製造所業務部に配属された。九十二人の優秀な同期に負けてたまるかと一生懸命に働いた。練習は火、木、土、日の午後だけで、きちんと仕事をした上でサッカーをすることを会社も望んでいた。

別を渡すとした総務部長が不在に気づき大騒ぎになった。直属の上司から謝罪の速達が届き、欧州から帰った僕を待っていたのは東京本社人事部長への異動の辞令。「扱いにくいヤツ」と思われたらしい。



新入社員入社のころ。新横浜電線製造所で

平裕らと親しくなった。小倉と故大平正芳首相の次男坊だった大平はサッカー好きで、寮の近くの小学校で練習していると球拾いを手伝ってくれた。それが縁で小倉は部のマネージャーになり、大平は援会作りに励んで、永井良和ら若い部員の面倒も本当によくみてくれた。

私生活は充実していた。横浜・妙蓮寺の百人寮という独立身寮で暮らし、縦と横のつながりができた。サッカー以外の仲間がたくさんでき、同期では富士電機社長の御曾司だった金成弘之や古河家の古河正純、一期下では小倉純二(現国際サッカー連盟理事)や大

は、サッカーのおかげで私ともにかわいがってもらった。後にリーグや財政規模が拡大した日本協会で経営の仕事ができたのは、古河でしっかりしたサラリーマン教育を受けたからだと心から思う。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵三郎

日本代表Aマッチ出場数二十六、六七年日本リーグアシスト王。こんなキャリアを残し、一九七〇年に僕は現役を退いた。三十三歳だった。

そのままコーチになり二年途中でから監督に昇格。チーム作りに手応えは感じたが最後の壁をどうしても突き破れない。いろいろ悩んだ末に鬼監督の自分が降りることで選手が伸び伸びプレーして勝てるようになるかもしれないと思った。それで七六年から監督を鎌田光夫に譲った。案の定、すぐに天皇杯と日本リーグの二冠達成。してやったりと、ひとりほくそ笑んだ。

監督を辞め、身軽になった

僕は会社にサッカー部の待遇改善を訴えた。留学制度もその一つ。七六年、ブラジルのパルメイラスに宮本征勝コーチと奥寺康彦が渡った。

二カ月間の留学が実現した

壁破れず監督も辞す

部の待遇・環境改善に奔走

のは村田愼のおかげだ。三国丘高時代からの親友で早大時代は卒業までの間、授業の代返やら全面的にサポートしてくれた。結婚式の司会も頼んだ。久保田鉄工に入社するとサンパウロ駐在の経理担当重役となり同地で十年以上暮らした。そんな彼がパルメイラスへの橋渡しに始まり物心両面で二人の面倒を見た。この飛躍の機会がなければ奥寺が

ドイツで日本人初のプロになることもなかっただろう。それはさておき、強豪といわれた古河がリーグ制覇までに多年を要したのはなぜか。僕の入社二年目、六三年五月にサッカー部は会社から選手の特例採用と一年間の対外試合禁止を通達された。業績悪化と社長交代が重なり活動を自粛しろとなった。船橋正夫

た。三菱重工など強いところはどこもそうだった。

選手を本社採用できなくなつた古河は一計を案じ、関連会社の古河産業や東新プレスなどを使って高卒選手を獲得する。木村武夫や森原隆らがそつた。七〇年代から本社で



選手採用が復活、七二年木之本興三、七三年に清雲栄純、淀川隆博らが入ってきた。環境面も僕らが「毎日午後から練習すべきだ」と掛け合

い、当時の後藤虎雄常務らの理解を得て、七五年から可能になった。たたき上げの高卒と即戦力の大卒の融合に環境

改善、そつということが合算して七六年の二冠だった。

ただ、いいことばかりではなかった。専業の度合いを強めるほどに職場から遠ざかり、社員の応援は少なくなつた。この矛盾に最も直面するのが引退間近の選手たち。職場に帰っても冷遇されるだけ。ある意味で僕はその傷口を広げるのに手を貸したことになる。

サッカーが大学生と同じレベルで日本一を決める競技ならよかったが、それは停滞を意味する。ましてプロで固めた外国に勝とうとしたら専業化は避けて通れない。国際的な競技のそれは宿命だった。僕らにまだそこまでの時代認識はなかったが、Jリーグを生むマグマはこのころから静かにたまり始めていたのだらう。

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

⑭

川淵三郎

一九八八年五月二日。自宅

でくつろぐ僕の人生を大きく変える電話のベルが鳴った。

そのころ僕は古河電工名古屋支店の金庫営業部長

だった。僕の辞書に單身赴任はなく、女房の康子、受験で大変な時期だった二人の娘、純子と英子も引き連れての転勤。

電話の主は支店長の安徳賀元さんで「古河産業に出向してほしい」という。それなりに業績を上げ、営業部長あたりで本社に戻れると思っていた僕は顔面蒼白になった。決して悪い話ではなかったが、僕も五十一歳になっていたから「これで本社に二度と戻れない。サラリーマン人生の先が見えた」

と落ち込んだ。それと同時に舞い込んだのが日本リーグ(JSL)の総務主事にならないかという話だった。当時の総務主事は三菱重工の森健児。彼も同社

務めたりした。すべてボランティア。しかし、十年一日のごとき協会の体質に嫌気が差し、八四年のロサンゼルス五輪予選敗退を機にサッカーのすべての公職から退いた。

時期を同じくして思いがけない要請が二つ。どちらが前向きになれるか。不満を押し殺してうじうじ働くのは性に合わない。当時のJSLがプロ

大改革に賭ける決断

「プロ」への偏見とも闘う

の名古屋支店で働いていたが、社業が忙しくなるにつれ総務主事との両立が難しくなり、一足先に東京に戻る僕に後事を託したいという。

サッカーとは完全に縁を切ったつもりだった。古河の監督を辞めた後、七六年から七九年までJSL運営委員、八〇年から日本サッカー協会強化部長となり、渡辺正監督が病魔に倒れた後は監督代行を

の古河産業への出向は六月一日付け。その二カ月後の八月一日、僕はJSL総務主事に

務めたりした。すべてボランティア。しかし、十年一日のごとき協会の体質に嫌気が差し、八四年のロサンゼルス五輪予選敗退を機にサッカーのすべての公職から退いた。時期を同じくして思いがけない要請が二つ。どちらが前向きになれるか。不満を押し殺してうじうじ働くのは性に合わない。当時のJSLがプロ

だ組織のプロ化だった。社長もコーチも選手も広報も営業もサッカーに携わる誰もがプロになり、その仕事ぶりで評価される、明快で逃げ道のない世界を作ること。

幸いといつべきか、僕は仕事とサッカーを両立すること

プロスポーツへの偏見とも闘うつもりだった。日本には深酒した翌日にホームランを打つと「これぞプロ」と褒めそやす愚かしいスポーツ観があった。プロスポーツを単なる興行ととらえる向きも。僕がクラマーさんたたき込まれ、早大生ころから欧州で見聞きしてきた世界はそうではなかった。スポーツを純粹に楽しむ老若男女がいて、それを可能にする豊かな環境があり、そつした土壌から育つプロは人々からも尊敬される最高の模範だった。この日本では実現不可能な世界だと思っていたが、思いも寄らない形でそのチャンスがやってきました。



⑥時代サラリーマンの古河名
た。この日本では実現不可能な世界だと思っていたが、思いも寄らない形でそのチャンスがやってきました。

の素晴らしさも弱さも両方熟知していた。サッカーを口実に仕事の手を抜き、仕事を口実に練習をさぼったことはなかったか。胸に手を当てたらカワブチサポロウとしては思い当たることばかりだった。そんな僕だからこそ退路を断つ役は適任かもしれない。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川^{かわ}淵^{ぶち}三^{さぶ}郎^{ろう}

⑬

当時の古河産業の上田茂社長は僕の良き理解者だった。「仕事に迷惑かけるなよ」と

「仕事に迷惑かけるなよ」と「仕事に迷惑かけるなよ」と

アマが混在する現状を破るにはスペシャリートを立ち上げるしかないと答申した。

から当然といえば当然。参加要件を作ってはみたものだけれだけの団体が名乗りをあげてくれるか不安だった。

た。そういう意味では単なる

トヨタ、清水FC、松下電器、

団体発表

日本サッカーリーグ(JSL)事務局にいたのは事務局長の本之本興三、日産

10に絞り「Jリーグ」

30年の会社勤めに終止符

自動車佐々木一樹

に指示したのは第二次活性化委員会

八九年十月にJSL一部、



プロリーグへの参加は実績のある日立、フジタ、ヤマハ、ヤン

たちで、少し遅れて博報堂の加賀山公も加わった。博報堂は先の見えないサッカーのプロ化に社を挙げて取り組み、門馬敦典さん、岡本純さん、小竹伸幸さんら有能な人材を投じてくれた。みんな夢の実現に熱く燃えていた。

使用できる一万五千人以上収容のスタジアムを確保、ユースなどの下部組織を持ち、監督とコーチはライセンス保持者に限る、などなど。

募集したら二十チームも応募してきた。団体の法人化、プロ選手は十八人以上、地域住民、自治体、企業との三位一

想を打ち出したJリーグは、企業にとっても乗りやすいバ

当初は八チームでのスタートを考えていたが十チームに変更。それでも二十から十に減らす必要が生じた。

プロリーグの出発点はJSLが一九八八年三月に立ち上げた第一次活性化委員会(委

当初、プロリーグではなく

わらず、である。

減らす必要が生じた。

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵 三郎

16

Jリーグに参加する十の団体が決まる過程では本当に色々なことがあった。

プロ野球でさえ採算が合っている球団はごくわずか。人気も動員力もないサッカーのプロ化が成功するわけがないと大半の経営者は疑心暗鬼だった。しかし、ふるいにかげられ落とされそうになると態度が変わった。おかげで参加条件をさらに厳しくできたことがJリーグの成功につながった。

名称では、ガンバ大阪は本当は「大阪ジョーズ」になるはずだった。松下電器が米映画会社ユニバーサルを傘下に収めたことで、スピルバーグ監督の映画「ジョーズ」から

あり、当時の監督だった宮本征勝も浜松からの移転に乗り気だった。最終的に本田がプロ化を見送り、三菱自動車がパートナーになった。もし本田との話がまとまっていたら、今の浦和はどんな浦和になっていたのだろうか。一番印象に残るのはやはり鹿島だ。最初陳情に来られたのは住友金属鹿島製鉄所所長

拝借できるということだった。一九九二年三月、瀬戸内海にサメが現れて人を襲ったためにこの案は幻と消えた。

地域に根ざす第一歩

前売り4万枚に78万人応募

地域性でいうと愛知が最初は空白だった。これでは全国

Jリーグの格好が付かない。それでクラブ世界一を決めるトヨタカップが縁で、豊田章一郎さんと親しい長沼健日本サッカー協会副会長(当時)がトヨタの出馬を懇請。トヨタは候補に転じるとチーム名から企業名を外し、Jの理念を後押ししてくれた。

レッズで有名な浦和も最初は本田技研との縁談が先行した。埼玉真和光市に研究所が

を建てるなら考えないこともない」と言った。そうしたら竹内藤男知事の鶴の一声で「つくります」。その執念たるや。心配された戦力は本田から宮本監督以下、黒崎比差支、本田泰人らが合流。Jリーグ最初の優勝チームになっ



カズ(左)はJリーグが生んだ最大のスター(1992年)

モニーで僕は宣言した。「スポーツを愛する多くのファンの皆様に支えられましてJリーグは今日、ここに大きな夢の実現に向かって、その第一歩を踏み出します」。地域に根ざしたスポーツクラブを全国に作るという思いを込めたメッセージだった。

Jリーグの誕生は熱狂的に歓迎された。発足前、僕らはクラブの平均収入を五億円前後に見積もっていた。ふたを開けると平均収入は二十五億円に達し、五十億円近く稼ぐクラブまで現れた。観客動員は約四百一十万人。日本リーグが二十七年かけて集めたお客さんの半分に近かった。まさに順風満帆。

九三年五月十五日、Jリーグ開幕の日。前日の雨はすっかり上がっていた。記念すべきカードはV川崎(現東京V)対横浜M。全席指定のチケット総数六万枚のうち、約四万枚の前売りに約七十八万六千人の応募があった。開会セレ(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵三郎

①

Jリーグの立ち上げに奔走していた一九九一年三月、僕は日本代表強化の総責任者に指名された。肩書は日本サッカー協会強化委員長。引き受けたのは理由があった。代表監督をプロ、それも外国人に任せなかったのだ。どちらも協会にとつて初の試み。

それまで代表監督を協会が雇うことは一度もなかった。これはと思う人物が所属する企業に頭を下げて、了解した企業は関連会社に出向させるような感覚で協会に送り出す。給料は企業持ちだから成績が悪くても協会の方から「辞めろ」とは言にくい。そんなアマチュアな監督にラモス瑠

偉やカズ(三浦知良)といった個性的なプロを束ねられるわけがなかった。

旧弊を打破するために呼んだのがオランダ人のハンス・オフトだった。彼の仕事ぶり

代表の「清貧の時代」を知る都並敏史に後で「協会も一緒に戦ってくれていると思うとう

「協会も一緒に戦う」

代表監督にプロ、大きな功績

は素晴らしい九二年アジアカップ(広島)で初優勝、翌三年のワールドカップ(W杯)予選もほとんどん拍子で最終予選まで進んだ。しかし最終決戦の地、カタールのドーハに乗り込むと重圧からか調子がおかしくなった。

初戦のサウジアラビア戦の引き分けはよしとして、次のイラン戦の敗北はまさに想定外。僕は何とかチームを鼓舞

したくて「勝ったらボーナスを出す」と宣言した。初めて予選全試合が生中継されていて、次の試合に負けたらすべてが終わる。そう思うとなりふり構っていられなかった。理事会の承認を後回しに告げると選手は大歓声をあげた。

代表の「清貧の時代」を知る都並敏史に後で「協会も一緒に戦ってくれていると思うとう

れしかつた」と言われた。その後、北朝鮮と韓国に連戦でイラクにロスタイムに追いつかれ、サウジと韓国に米

国行きを奪われた。イラク戦のことは土壇場の記憶がない。同点ゴールがシ

ョートコーナーから生まれたことも後でテレビで見えつ

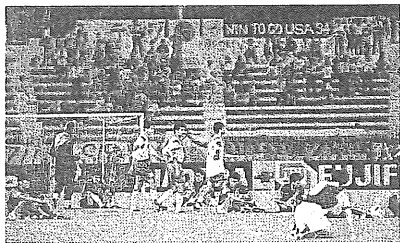
いた。ラモスがあのパスを出さなければ、カズの足が届い

ていれば――浮かんでは消える「もし、あれが……」の数々。後半のロスタイムはイラク応援団がピッチに缶を投げ込んだ中斷から生じた。「ロ

スタイムなんかとるなよ」と審判を恨みもした。

試合後、ベストイレブンの表彰式が遠くのホテルであった。しかし、あの気丈な柱谷哲二主将でさえ「出席は勘弁してください」。批判は覚悟

で僕が欠席を許した。W杯出場は逃したが、それでもオフトの功績は大きかった。成田空港に着いて記者に



座席にグラウンドに座り込む日本人

囲まれた僕は「この敗退は日本サッカー界発展の大きな出発点になります。四年後は必ずW杯に行きます」。偽らざる気持ちだった。

「ドーハの悲劇」として語られるこの戦いを放映したテレビ東京の視聴率はサッカー

界始まって以来の視聴率(四八・一%)を記録した。スポーツの感動は勝った負けたではなく、どれだけ感情の振幅

をもたらしただかにある。その視点に立てば国民的関心事になったこの予選の価値はとて

つもなく大きかった。五輪に勝る最大のスポーツイベント、W杯というサッカー界の

国際的な常識も一瞬にして日本に定着した。

ただ、今でも思う。もし、ここで日本がW杯出場を果たしていたら、つまり韓国が出

場を逃していたら、韓国は二〇〇二年W杯招致に手を挙げ

ただろっか、と。

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵 三郎

⑬

ちない。その後、親自家のベッケンバウアーやクラマーさんとも会ったが、彼らも招致話になると口ごもる。

そのままアルゼンチンに渡り南米の理事三票を固めた。会合をセットしたのはプエノスアイレス在住の実業家、JFA国際委員の北山朝徳さんだ。食卓のナプキンに血判状がわりに全員で署名した。

「韓国と共催」揺れる

日本びいきの会長を信じし...

四月には日本側を安心させる二つの会談があった。日本招致協議連会長の宮沢言一元首相がアペランジェ会長と米國で会い、「投票には何の心配もない」と告げられた。朗報を胸にエジプトに飛ぶと、アフリカ連盟のハヤトウ会長が「アフリカの三票は日本に」と確約してくれた。

ただ、その足でイングランの協会のミルチップ会長を訪ねると、いきなり「日本はなぜ共催に反対なのか」と非難する口ぶり。二カ月前の訪独の印象と合わせ、欧州は共催で動いていると初めて疑念が生じた。ずっと後でクラマーさんに確かめたら「共催でも筋から僕にも接触があった。共催を認める規約がFIFAになかったから、そのたびに無理だと答えていた。」

投票は六月一日のFIFA理事会。票数は二十一。直前の票読みでは南米、アフリカの各三票とメキシコ、サウジアラビア、ノルウェー、ロシアが日本につく。これで十対十。同数の場合、会長が日本に投じて勝つ。しかし、八票の大栗田の欧州が共催で一致団結したり……。

五月二十一日のJリーグ理事会後僕は「十一」に一つは……」と新聞記者に語った。警告を発する意味でも、FIFAが認めない、あり得ないはずの共催案がにわか浮上する可能性をお知らせした方がいいと思っただけだ。一方でまだ信じていた。アペランジェ会長の豪腕を。



宮沢元首相(前列右)、韓国の鄭会長(同左)と争いのなかの招致争い(前列右)の相

筋から僕にも接触があった。共催を認める規約がFIFAになかったから、そのたびに無理だと答えていた。投票は六月一日のFIFA理事会。票数は二十一。直前の票読みでは南米、アフリカの各三票とメキシコ、サウジアラビア、ノルウェー、ロシアが日本につく。これで十対十。同数の場合、会長が日本に投じて勝つ。しかし、八票の大栗田の欧州が共催で一致団結したり……。

W杯招致活動

一九九一年六月、日本サッカー協会(JFA)は二〇〇二年ワールドカップ(W杯)招致委員会を設立した。韓国が招致委を立ち上げたのは九四年一月。前年秋の米国W杯予選突破で勢いを得て「一度もW杯に出ていない日本より開催国にふさわしい」と主張、出遅れた招致活動をけん引したのが新任の鄭夢準・韓国サッカー協会の長だった。

同会長の動きは急で、五月の国際サッカー連盟(FIFA)副会長選挙でJFA副会長の村田忠男さんらを破ってFIFAにポストを得た。これで投票権を持つ理事を直接切り崩せるようになった。

同会長の動きは急で、五月の国際サッカー連盟(FIFA)副会長選挙でJFA副会長の村田忠男さんらを破ってFIFAにポストを得た。これで投票権を持つ理事を直接切り崩せるようになった。

同会長の動きは急で、五月の国際サッカー連盟(FIFA)副会長選挙でJFA副会長の村田忠男さんらを破ってFIFAにポストを得た。これで投票権を持つ理事を直接切り崩せるようになった。

私の履歴書

川 淵 三 郎

19

一九九六年五月三十日の午後。僕たちが泊まるスイス・チューリヒのホテルに国際サッカー連盟(FIFA)のブラッター事務総長から電話がかかってきた。ワールドカップ(W杯)開催国を決める投票二日前のことである。

決定 催 共

電話に出た日本サッカー協会(JFA)の岡野俊一郎副会長に、事務総長は「韓国からは共催でもいいという文書が来た。日本はどう考えているかを知りたい」。緊急事態発生、ホテルの一室に全員集合がかかった。

真意を探ろうと手分けして情報収集すると、欧州の理事八人が「共催」で結束、アフリカの三人の理事も巻き込んで過半数を握ったことが分かった。この十一票は共催に反対した側には回さない、党議拘束があり、FIFA調査団の報告書が共催を支持していることも。親日家のモリー

で過半数を握ったことが分かった。この十一票は共催に反対した側には回さない、党議拘束があり、FIFA調査団の報告書が共催を支持していることも。親日家のモリー

日韓関係大きく好転

「名称」めぐり難しさも痛感

「名称」めぐり難しさも痛感。シャスの理事からは「欧州には逆らえない」と涙ながらの電話があった。

決まった当座はショックだった。しかし共催決定は意味あるものと思えるようになった。国際舞台での政治力、情報収集力、したたかな交渉力の必要性を痛感し、JFAに本来の意味での国際化をもたらした。何より共催は日韓関係を大きく好転させた。

僕は「勝負」を主張した。過半数を握る彼らが共催にこだわるのは韓国単独開催に不安があるからで、欧州はブラジル人のアペランジェ会長が支持する日本単独開催を弄ることで「あなたの時代は終わった」と告げたいのだ。しかし、リスクは大きい。最終的に長沼健会長がFIFAに事実上の共催受諾を回答する苦渋の決断を下した。

驚いたのはアペランジェ会長の変わり身の早さだ。日本の回答を手に入れると開催国の決定を一日前倒し、共催を三十一日の理事會に自ら提案する離れ業をやつてのけ弱地を脱した。日本が頼った豪腕はここでだけ発揮された。

た。それが共催決定翌日の朝食会で、「皆さんは相当がっかりしておられるでしょうが、後世、両国にとつてやっ

たら「大会名はジャパン・コリア」「決勝戦は日本で」と日本有利にどんどん決まる。「これでは韓国に帰れない」と猛抗議する鄭副会長にヨハンソン副会長は「私を脅すのか」と激高。長沼さんと岡野さんと僕の三人で協議し「英語表記はコリア・ジャパンでいい」と譲った。



(左) JFA 会長 岡野俊一郎、(中) FIFA 副会長 ヨハンソン、(右) 日本サッカー協会会長 長沼健。日本語表記は「日韓」と認めさせた上で、だから後に「日本は正式名称を使っていない」と騒いだ時には怒り心頭だった。

ものだと今更ながら思つた。スポーツ政治の冷徹を改めて知ったのが同年十一月にチューリヒで開いた第一回検討委員会。W杯の開催概要をここで決めたが、委員長のヨハンソンFIFA副会長は韓国の鄭夢準副会長と「アペランジェ降ろし」でタッグを組んだ仲。日本は不利と思ってい

概要が決まった後、FIFAが発表するまでは詳細は伏せることを確認した。ところが韓国ではすぐに「名称を勝ち取った」というニュースが流れ、FIFAも我々も口があんぐり。共催の難しさを知る最初の事件だった。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵 三郎

20

前に2-0にするシュートが
ゴールポストに阻まれた直後
に同点に追いつかれる最悪の
結果に。僕も絶望のふちに立
たされた。

交代が真目に出た。加茂解任
とジーコ待望論をメディアが
公然と論じる中、僕はチーム
とカザフ、ウズベキスタンと
の連戦に旅立った。

韓国戦の直後、日本サッカー
田は古河電工時代はサッカー

ジョホールバル

田武史監督率いるチ
ームがイランに勝
ち、初出場を決めた
時は女房や娘と抱き
合って喜んだ。

試験続きのアジア予選突破
だったが、中でもこたえたの
が一九九七年十月四日にカザ
フスタンに引き分けた後、加
茂周から岡田コーチにつない
だ監督交代劇だった。

直前の韓国戦で日本はホー
ムで痛恨の逆転負けを喫して
いた。早めに守りに入る選手

仏W杯出場勝ち取る

試験続きの中で監督交代劇

協会副会長の岡野俊一郎さ
んに電話をかけた。万が一の
場合、中央アジアではヒザ等
の問題で新監督を急に呼ぶこ
とは難しいと確認し合い、会
長の長沼健さんにも伝えても
らった。しかし大仁邦弥、今
西和男ら強化委員会はもう限
界だと踏んでいた。カザフ戦

の前に二人が来て「話がある」
と。僕は「試合の後にしろ」
と拒んだ。が、試合は終了直
て考えたい。「だめだ。今

この場で決める」。岡田が付
けた条件は二つ。加茂の了解
と、ウズベクに負けたら監督
を続けるが勝ったら白紙に戻
すこと。負けたらW杯出場は
絶望、そこから先は敗戦処理
になるから後始末は自分がつ
ける、勝ったら新監督の下で



大喜びで初出場を決めたW杯
共同イレブン

反響に出ればいい、という意
味だ。いかにも岡田らしい。
加茂に交代を告げたのは長
沼さんだ。加茂は「代えるな
ら岡田が適任」と不快感を表
すことは一切なかった。二点
目が入っていたらこの交代は
なかった。監督業とは非情な
ものだ。
（日本サッカー協会会長）

中央アジアの一週間は人生
最悪の日々だった。監督更迭
の重苦はおろか、Jリーグで
はクラブの経営危機や撤退な
ど、逆境の日本サッカーに追
い打ちをかけるような問題が
噴出していった。人はこんな時
に屋上から飛び降りる心境に
なるのだろうか——宿
舎に一人でいるとそん
なことまで頭をかすめ
た。

十一月十六日のジョ
ホールバルの歓喜に僕
は現場で立ち会って
いない。長年の疲れがど
っと押し寄せ、胆嚢を
摘出手術して自宅療養
中だった。結果的にウズベク
に引き分け岡田は指揮を執り
続けた。あの難局を乗り越え
られたのは岡田だからこそ。
九八年はフランスW杯の年
だ。「さあこれから」とい
う時、さらに身を切る思いをす
ることになる。

私の履歴書

川 淵 三 郎

②

一九九八年は日本が初めてワールドカップ(W杯)に出た記念すべき年だ。しかし、僕にはもう一つの出来事の方がトラウマになって

いまだに頭から離れない。横浜をホームとするマリノスとフリーゲルスの合併である。

九三年から九五年の三年間、Jリーグはクラブ数も十から十四に増え、順調そのものだった。だが、九六年から好況に浮かれた放漫経営のツケがあちこちで出始めた。

クラブ数が十七になった九七年は一試合平均の入場者数が一万百三十一人にまで落ち込んだ。清水は給与が救済に乗り出し消滅は免れたが、平

塚(現湘南)など五つのクラブの出資企業がサッカーから手を引きそうだという話が私の耳に届いていた。

放漫経営のツケ出る サポーターの反発には感謝

社長が僕を訪れた。

横濱Fを共同で支えてきた佐藤工業が撤退を決定。全日空単独での運営は難しく、同じくマリノスを支える日産自動車と一緒にやっていくという説明。「Jストクター」の異名を持つカルロス・ゴーンさんが来たら真っ先に整理される可能性もあり、日産も全日空もこの合併にクラブの命運を賭けていた。

この合併から少し遅れて十一月には読売新聞がV川崎の

クラブの生き残り戦略を受け入れたが、サポーターの反発は想像をはるかに超えた。反対運動の一団が僕を訪ね

「サポーターをつくった川淵さんがどうして僕らの生きがいであるチームを取り上げるのか」と切々と訴える。この時ほどチェアマンとして辛く情けない気持ちを感じたことはない。それでも、合併を

認めずに共倒れされたら撤退の連鎖を招きかねない。心を鬼にするしかなかった。

このサポーターの熱意は後に横濱FCを生む原動力になった。反対運動で見せたパワーは撤退を考える他の企業に對する抑止力にもなった。いろいろな意味でサポーターには心から感謝している。

この合併から少し遅れて十一月には読売新聞がV川崎の

出資企業から外れると報じられた。V川崎とは九三年の調布への移転問題から角突き合わせてきた。当時のV川崎・河野慎二副社長は早大サッカー部の同期で、板挟みの苦勞を相にかけてもいた。そんなわけでこの撤退は正直、ほつとした部分があった。



合併で横濱Fと横濱Mの記者会見(中央が筆者)

コンセプトとの違いに気づいた結果だ。地域密着を理念に放送権などはリーグが一括管理する僕らのやり方と、全国区を目指す彼らとの間には本質的に相いれないものが横たわっていた。

試験の九八年をJリーグは何とか乗り越えた。ここを機に経営諮問委員

読売といえは、グループの総帥、渡辺恒雄さんとの論争も忘れられない。新聞やテレビで面白おかしく伝えられるたびにJリーグの理念も世間に広まった。今から思うとありがたいアシストだった。

読売の撤退はプロ野球の巨人を典型とするそれまでのビジネスモデルと、Jリーグの断行したことが各クラブの財政を大きく好転させた。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

②

川淵三郎

個々のクラブには経営のスリム化を図ってもらう一方で一九九九年から十六クラブの

一部（J1）の下に

十クラブからなる二

部（J2）を作る拡

大政策を採った。当

時は経営危機の今こ

そ少数精鋭にして限

られたパイの取り分

を大きくすべきだと

いう意見もあった。

僕は断固退けた。全国津々浦

々にスポーツを楽しむ拠点と

してJクラブを点在させるこ

とが目的なのだから縮小均衡

はあり得ないと。

クラブの数を増やすことで

パイ自体を大きくする路線に

間違いはなかったと思う。昨

年の観客動員は史上最多の八

百五十九万五百十人を記録。

鬼武健二チェアマンは二〇一〇年までにこれを千百万人にしようとしている（イレブン

ミリオンプロジェクト）。

今年はJ1が十八、J2は

熊本と岐阜の加盟で十五に増

える。その下にはJを指す

チーム、地域がさらに五十か

ら六十ほどある。浦和のよう

に収入が七十億円を越すクラ

ブもあれば三億円程度しかな

いクラブもあり、まさにピラ

ミッド構造だが、底辺のクラ

ブも条件さえ整えば昇格して

いけるのがJリーグの良さ。

チャンスは平等だ。

各クラブが身の丈にあった

経営に取り組んでくれたおカ

げで〇二年夏、僕は後顧の憂

いなくチェアマンから退くこ

とができた。在任十年九カ月

を振り返ると、やれることは

やったという心境だった。

クラブの基本構造は欧州を範としつつ、ビジネス面では放送権、商品化権、肖像権などの一括管理など米國アプロスポーツの手法を採り入れた。指導者にS級ライセンスの取

り得ぬ

得を義務づけ、現役時代の高

名だけで監督になれるような

安易な妥協を排した。ゼネラ

ルマネジャー（GM）講座も

開講。これらは前職に関係な

く、実力と情熱さえあれば誰

でもなれる可能性がある職業

にしたかったからだ。

審判のレベルアップのため

に外国人審判も積極的に招い

た。まだ問題は多いが、ワー

ルドカップ（W杯）ドイツ大

会三位決定戦で上川徹、昨年

の十七歳以下W杯決勝で西村

雄一が笛を吹いたのはその成

果といえるだろう。セカンド

キャリアの問題にもリクルー

トにいた八田茂さんらにお願

いし他のスポーツに先駆けて

と提供

のスポーツ文化の貧しさ

こそ僕が変えたかった最

「縮小均衡はあり得ぬ」

身の丈にあった経営路線敷く



取り組んできたつもりだ。

選手の投票で最優秀選手を

決めるのも画期的だった。表

彰式のJアウォーズは日本に

もカップル文化を定着させた

くて夫婦、恋人同伴を奨励、

当初は反対されたがブラック

タイ着用も義務づけた。最初

は億劫がっていた各クラブの

社長夫人も、雑誌「ミセス」

編集長の美野田泰子さんの全

面協力を得て美しく着飾って

もらったら翌年からやみつき

になられて。サッカーと何の

関係もないとの批判もあった

が、プロならではの華やかさ

を認めないそういう日本

のスポーツ文化の貧しさ

こそ僕が変えたかった最

たるものかもしれない。

山あり谷ありのチェア

マン時代の喜びに、九四

年に母校早大商学部卒

業式、九五年には早大の

入学式に主賓として呼ば

れたことがある。学生の

時には特に意味もなく欠

席したが、僕のいないところ

で当時の工藤孝一サッカー部

監督は「入学式に出ないヤツ

はろくな人間にならない」と

言っていたらしい。三十余年

の歳月を経て「これでオレも

まともになれたかな」と晴れ

がましい気分だった。（日本サッカー協会会長）

私の履歴書

②

川淵 三郎

ワールドカップ(W杯)日韓大会終了後の二〇〇二年七月、僕は日本サッカー協会(JFA)の十代目会長に就いた。

任 就 長 会

これが二度目だった。一九九八年フランスW杯の期間中、長沼健会長に内々に後を継ぐよう要請された。しかし、日韓

W杯を控え同じ副会長でも国際的な知名度がある岡野俊一郎さんが適任に思え、Jリーグの再構築に忙殺されていたこともあり断った。ところが岡野さんも会長になる気はないという。長沼さん、岡野さん、小倉純二JFA専務理事と話し合いつつに僕が「諸橋晋六さんにお願ひしたらどうか」と提案し、衆

議一決した。三菱商事会長の諸橋さんがW杯招致活動で果たされた貢献は財界人では断トツだったし、サッカーへの愛の深さは誰もが認めるところ。しかし、諸橋さんは「自

「キッズ育成」に重点

「戦える協会」へ組織改革も

注いだのがキッズの育成と県

分は年をとりすぎている」と固辞された。そういう曲折を経て岡野さんに決まった。二度目は迷わなかった。Jリーグは安定軌道に乗り、スポーツ団体にありがちな同好会的体質に風穴を開け、JFAを企業組織に変えたい強い気持ちもあったからだ。会長職は神輿に徹すれば気楽なものかもしれない。Jリーグのおかげで代表は強化さ

ダメになってしまう。運動や

四肢を使うことで知能も発達する。学力低下を嘆く前に集中力、持続力を保てる丈夫な骨格・筋力をつけさせる必要がある。サッカー指導が技術論に終始しがちなことにも不満があった。楽しいことが大前提でそこから達成感や目的意識、フェアプレー精神も涵

く反応したのが山梨県協会。六歳以下の育成プログラムに即座に着手した。そういう事業に約一億円の予算をつける。他の県協会も動き出し、初年度だけで約七十万人の幼稚園児と交流の場が持てた。〇六年四月には福島県の全面協力のもと地元の広野中、



会 長 に 就 任 し 記 者 会 見 (2002年7月)

養できれば……。そこでスタートさせたのが外遊びを推進するキッズプログラムだ。幸い、JFAの寄付行為にも「サッカーの普及、振興を通じて国民の心身の健全な発達に寄与するのを目的とする」とあり、JFAの義務として取り組む必要があった。JFAの投げかけにいち早

と手を組み、Jヴィレッジに中高一貫全寮制のJFAアカデミー福島を開校した。範をフランス協会に求めたサッカーのエリート養成機関だが、勉学を含めた人間教育も施している。近隣の農家で農作業も体験、生徒たちが収穫した米が昨秋、僕にも送られてきた。とてもおいしくいただいた。彼らがどういう形で巣立っていくのか待ち遠しくて仕方がない。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

24

川淵三郎

日本サッカー協会会長になってまだ間もない、二〇〇二年十一月二十一日。古河電工の同期会へと向かう車中に一報は届いた。「殿下が倒れた」。言葉

を失った僕に追い打ちをかけるように、会場に着くと日本協会名誉総裁・高田宮憲仁親王の訃報が待っていた。四十七歳。信じられなかった。あわてて高田宮邸に駆けつけると家の中へ通された。亡骸を前に初めて僕らの太陽であり誇りであり、世界に自慢できる殿下を失った衝撃と寂寥感が押し寄せてきた。妃殿下とお嬢様たちがいることも忘れ子供のように泣いた。殿下がサッカー協会の名誉

慕われ愛された人柄

偉大な貢献、名誉総裁失い衝撃

と。勲章を受け取った殿下は流暢なスペイン語でお礼のスピーチをされた。それだけでも驚きなのに、広大な牧場で催されたパーティーでギターをプレゼントされた殿下はその場で五、六曲、見事な演奏を披露された。何百人といった招待客は大歓声と拍手喝采。その場にいた日本人は皆、鼻高々になった。



ギターもお上手だった殿下。右は妃殿下

を受けて創設されたからだ。Jリーグのフェアプレー賞にも高田宮杯を贈られた。二〇〇二年春の園遊会では殿下に窮地を救われもした。天皇皇后両陛下のご下問に無事答えられて緊張が緩んだの

事になりそんな話をどれだけしゃべり続けたことか。僕にとって殿下は名誉総裁というより、非礼が許されるならばサッカーの発展を一緒に考えてもらえる「仲間」だった。代表監督をジークにする時もマスコミに出る前に相談し、報告もした。中学時代からサッカーが好きで、フットサルが好んで、「TONO」というチームを持っておられた。国体の際には必ず協会職員を率いて地元チームと対戦するのを楽しみにされ、亡くなられた年の高知国体では見事なボレーシュートを決められた。生涯最後のゴールだったかもしれない。殿下が亡くなられた後、名誉総裁になられた妃殿下の希望で国体恒例の対抗戦は今も続いている。妃殿下は毎年最後までその試合を楽しそうに観戦されている。(日本サッカー協会会長)

にワールドカップ日韓共催が決まってからは、まさに「日本の顔」として世界中の要人と接していただいた。国内外での英語のスピーチはウィットに富み、殿下の人柄に誰もが魅了された。だからこそ世界中のサッカー人がその死を悼んだのである。今もサッカー界で語り草なのは九九年に南米サッカー連盟から勲章を贈られた時のこ

世界中のどんな舞台上に立つても押し出しが利く。僕らはその後を歩けば良かった。殿下がいることで日本サッカーの国際的地位がどれだけ上がったか分からない。少年層の育成、フェアプレー精神の大切さにも一言持っておられた。十五歳以下、十八歳以下の日本一を決める大会に高田宮杯と名付けたのは大会そのものが殿下の意を

だろ。陛下との会話を拾うためピンマイクを着けていたことをいつしか忘れた。殿下に「いろいろありまして」と話しかけたところ殿下が「ブチさん、マイク、マイク」。マイクに向かって「今の全部オフレコで」と頼んだが、殿下の制止がなかったら新聞記

る。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

⑤

川淵 三郎

「ゴメンナサイ」。ジーコは立ち上がり、日本語で謝った。二〇〇六年ワールドカップ(W杯)ドイツ大会。六月

十二日の初戦でオーストラリアに衝撃の逆転負けを食らった、あゝこのことである。ジーコを勇気づけるためにボンの練習場を訪れると、監督室のイスに

と嘆いていた。「だったら試合にも出るな」と。一つの勝ち負けでチームは結束もすれば、ばらばらにもなる。勝ちパターンに入っていたオーストラリア戦を自滅で落としてから惨敗の下り坂を止める術は誰にもなかった。

「会長がそんなことでいちいち謝る必要はない」と

アカップ直前、大会のノルマを確かめに来た。僕は「高原直泰と中村俊輔だけは連れて行ってくれ」と答えた。〇四年の中国アジアカップで故障の中田英ら主力を欠いた際「アジア軽視」と中国メディアが言いがかりをつけ、それが反日的な応援につながった苦い思い出があった。「二人以外の選手は若くてもいいんだね」とオシムは快諾してくれた。

ジーコとオシム

代表監督選びに腐心

運と信頼が交錯する重責

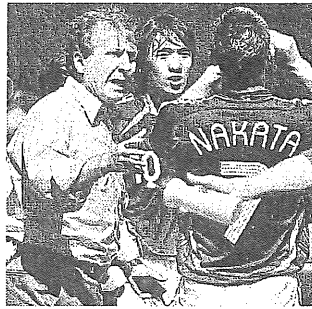
しよんぼりと座るジーコがいた。日本語でもうしたその一言に彼の万感の思いがこもっていた。僕は「まだ二試合ある。頑張りな」と抱きしめることしかできなかった。

運に見放された感じだった。ジーコを訪ねた後、グラウンドで中田英寿に会ったが、体調不良を理由に練習に出てこない選手に戦う姿勢が足りない

た。〇六年四月にジーコ夫妻と食事をした際、契約延長はせずに後任選びに着手することとで了解を得ていた。オシムとはそれから技術委員長の田嶋幸三が窓口になって下交渉を始めていた。

千葉の淀川隆博社長から千葉とオシムの契約はいつでも解除できることになっていると聞いていた。オシムも代表の仕事に関心を示し、W杯が

ただに病に倒れたのは残念でならない。幸い、奇跡的な回復力で僕も見舞いに何度か訪れたが、舌鋒の鋭さは以前と全く変わらない。いずれ、皆さんの前でお話する機会をつくれればと思っている。(日本サッカー協会会長)



中田英一と中村俊輔に指示を出すジーコ監督

日本サッカー協会会長としての最初の仕事は、ドイツW杯に向けた新監督を選ぶことだった。大仁邦弥を長とする

しかし、本大会のジーコは

た。〇六年四月にジーコ夫妻と食事をした際、契約延長はせずに後任選びに着手することとで了解を得ていた。オシムとはそれから技術委員長の田嶋幸三が窓口になって下交渉を始めていた。

千葉の淀川隆博社長から千葉とオシムの契約はいつでも解除できることになっていると聞いていた。オシムも代表の仕事に関心を示し、W杯が

ただに病に倒れたのは残念でならない。幸い、奇跡的な回復力で僕も見舞いに何度か訪れたが、舌鋒の鋭さは以前と全く変わらない。いずれ、皆さんの前でお話する機会をつくれればと思っている。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵三郎

(26)

歌手の森山良子さんともお近づきになれた。

手品が好きなのは僕の師匠は多湖輝さん。毎年夏、軽井沢の別荘に招かれ、ゴルフとマジックを楽しむ。奥様の須磨子さんは女房の理想の女性。

オペラ観劇も趣味の一つだが、誘ってくれたのはぴあの矢内広社長だ。矢内夫妻や作家の林真理子さんらと観劇の

之日本ゴルフ協会会長といった方々を紹介され、年に何度か会食して刺激を与えてもらっている。

無二の親友といえば協会副会長の小倉純二になる。知り合って四十六年になるが、僕に対して声をあげたのはたった一度。国際サッカー連盟

スで迎えられ、森喜朗日体協会長、出井伸之ご夫妻、女優の檀ふみさんら、次々に祝いの言葉をもらった。パーティーに参加できなかった阿川佐和子さんも含めて僕とゆかりのある人たちが一人ずつ色紙にメッセージを書いてくれた分厚いアルバムには安倍晋三

前総理、福田康夫総理から

友人に助けられ

ワールドカップ(W杯)ドイツ大会の後、失意のどん底で自宅で這上る僕に電話がかかってきた。オムロンの立石義雄会長夫人の会美子さんから「主人と息子も交えてゴルフをしませんか」。

会美子さんは、

Jリーグ時代にダイヤル・サービスの今野由梨社長の紹介で知り合った。会つなり「主人と顔がそっくり」といわれ、それが縁で僕は「義雄ちゃん」と、向こうは僕を「兄さん」と呼ぶ仲になった。

二〇〇六年七月十五日。脳天が焦げそつな日差しに気分転換どころか、四ホールで息が上がった。気がつくときコー

失意や悩みから解放

古希の祝いの分厚い色紙が宝

間、会美子さんは無言の激励を責き通した。おかげでホールアウトした時はフルマラソンを完走したような感動を覚え、すべて吹っ切れた。

後、作曲家の三枝成彰さんの講釈を聞く。これを繰り返すうちにどんどんオペラの面白さに目覚めていった。

仕事上の悩みを打ち明けるたびに「義弟は「功は禄で報い、徳は地位で報いる」「人

野球界ではソフトバンクホークスの王貞治監督、楽天イーグルスの野村克也監督、ご夫

妻、江本孟紀さん、相撲界では貴乃花親方。いずれも十五年

来のお付き合いだ。三菱商事元営業の設楽卓也さんからは森ヒルの森稔社長、安西孝

夫妻を通して、ファンだった

は森ヒルの森稔社長、安西孝



のとの言葉も。サックス奏者、渡辺真夫。どめは、その色紙の中に次の一文を見つけた時だ。

の理事選挙に立候補した僕が途中で「降りる」と言った時。「それはない」と烈火のごとく怒った。

「古希を御祝い申し上げます。サッカーと野球で青少年の精神向上に頑張りましょう。渡辺恒雄」

〇六年十二月三日、僕は七十歳の古希を迎えた。娘に食事誘われレストランの扉を開けると、いつも応援していただいている方たちの顔が。渡辺貞夫さんが奏でるサク

間けば、日本サッカー協会名誉総裁の高円宮妃殿下が直々に頼んで下さったとのこと。一生忘れられない誕生日になった。

(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵 三郎

②

日本サッカー協会(JFA)は役員に七十歳の定年制を敷いている。今年七月の改選で

三期目の任期も満了となり、七十一歳の僕はよいよ会長職を辞すことになる。

協会がなすべきこと

会長就任時、四十七の都道府県協会でも法人化しているのは十もなかった。それが今年すべての法人化が完了。僕が法人化にこだわったのは経理の透明度が増すからだ。それによって各協会が何にお金をかけ、どこを目指しているかがよく見えるようになる。

県協会への資金援助はJFAが精査して行っている。いいアイデアには予算をつけて事業化を助け、経理報告もき

ちんとさせる。二〇〇七年度は県協会に十億円以上助成した。剰余金として貯め込むより、地方の活性化に役立てた方が長い目で見ればリターンは大きいと信じている。

地方と世界をつなぐ

見る側のニーズにも応えて

一方で競争を促すために県協会のランキングを〇六年から作るようにした。採点基準を明示し、経理内容も公開。年間一億円以上の予算がある県協会は三十以上あり、一番多いところで四億円ほど。北海道など頑張っている協会もあれば、まだまだ努力の余地があるところもある。

県協会に頑張ってもらいたいのは、そこが未来を担う子供が

育つ土壌そのものだからだ。それに知恵を絞って出した案が事業化されると分かれれば、各県協会は有給でも優秀な人材を確保しようとする。法人

化の次のステップは職員のプロ化だ。今、スポーツの現場で働きたい新卒者や転職希望者は確実に増えているが、い

かんせん受け皿が少ない。パワーアップした県協会がその受け皿になれたらと思う。地方の足腰を強くしつつそれを国際競争力につなげる。

その地方と世界をつなぐ役割がJFAの本分だろう。国際舞台で重要な役割を演

じるには小倉純二JFA副会長が就いている国際サッカー連盟理事のポストを今後も確保し続ける必要がある。競技力向上にはコーチ、選手、フロン

の欧州との活発な往来が欠かせない。選手が外国に行くことを「流出」と嘆く向きがあるが、僕は欧州で常時二十人くらいプレーするようになってやっとな本物だと思

う。そのためJFAがやれることは選抜肢を山ほど用意す



小田池の市宿指島鹿鹿

そろそろ十年に一人の天才が現れてほしいものだ。

昨年、浦和がアジア・チャンピオンズリーグを制した。サポーターの歓喜を目の当たりにしながら「代表よりもおらがクラブ」という文化が育ったことに感銘を受けた。この浦和に競りかける勢力

がもう四つ五つ出てくるとJリーグは盤石だろう。そのためにここからの五年、十年は純粹に見る側のニーズに応えるスタジアムの新設、改装が大きなテーマになると思

う。

第二十五回で書いた千

葉とオシムの契約について、淀川隆博社長から「いつでも解除できる契約ではなかった」との指摘があった。オシムの代表監督就任にあたっては千葉関係者とサポーターに大変な苦勞をおかけしたのに配慮が足りなかった。(日本サッカー協会会長)

私の履歴書

川淵三郎

28

日本サッカー協会の会長を辞めた後、何をされるんですかとよく聞かれる。ボランティア活動は性格的に長続きしそ

うもないので、さわか福祉財団・堀田力理事長の「寄付も行動するのと同じ」という言葉に甘えようと思っ

か。これからのこと
Jリーグのチェアマンになつてから女房の人生は激変した。申し訳なく思うのが、嫌がらせの手紙や電話、根も葉もない中傷記事にさらしてしまつたこと。耐性がある僕はまだしも平凡な主婦が受けるストレスとしては過酷すぎた。見出しの暴力にも怒りを

覚えた。朝刊の週刊誌の広告が目につれないよう早くに起きて切り取ったりした。そういう書らしから解放してやれるかと思つとほっとする。女房は出産で大量出血した

のハママ会長から、日本サッカーがこの数十年の間に蓄積したノウハウをアジア全体の発展に生かしてほしいと直々に頼まれた。

最初は引き受けるつもりはなかった。一口にアジアといっても範囲は広大、国の体制も宗教も様々だ。日本とは国情が違いすぎる。ただ、ACL改革をテコに各国にプロリ

アジア全体の発展に

女房への恩返しも忘れず

実際に使用した止血剤が原因でC型肝炎を患った。昨年五月から週一回のインターフェロン治療を受け、体調はすべれない。それで今、僕は娘と分担しながら家事を手伝い、風呂の掃除や血洗いに言いつつのない達成感を味わっている。

もう一つ、乗りかかった船がある。AFCチャンピオンズリーグ(ACL)の改革だ。アジアサッカー連盟(AFC)に頼まれた。

最初は引き受けるつもりはなかった。一口にアジアといっても範囲は広大、国の体制も宗教も様々だ。日本とは国情が違いすぎる。ただ、ACL改革をテコに各国にプロリ

最終案をまとめているところ。計三十二チームの出場枠をどう各国に割り振るか慎重に検討中だ。越えるべきハードル

は多い。王族がクラブを保有する中東では、年俸五億円の選手がざらにいる一方で観客動員はさっぱりだったりする。王族が身銭を切るので黒字経営を目指す動機も弱い。宗教上の制約もあって女性の競技場観戦も不可。



昨年のACL表彰式で
＝フォート・キシモト提供

があったからこそだ。カタール人のハママ会長は僕の主張に賛同しているし、アラブ首長国連邦(UAE)などのクラブも真剣に耳を傾けている。イランもゼネラルマネジャーの育成に日本の知恵を貸してほしいと言いつつ

た。昨年の浦和のACL優勝が大きなインパクトになったのは間違いない。高額賞金、クラブW杯に通じる道……。新ACLの可能性が野心のあるクラブにははつきりと思えたのだ。

しかしそれは、ハードルを越えられたら大きく変貌することも意味する。新ACLの参加要件に「商業的な独立法人であること」を設けるなど思い切った提案をしている。女性客を忌避していたら永遠にワールドカップ(W杯)を開催することは無理。Jリーグの成功も子供と女性の開拓

世界の人口の六割を占めるアジアの潜在能力を引き出すために何をどうすればいいのか。アジアから世界一のクラブを、世界に誇れるACLを。それが自分に課した最後のミッションである。
(日本サッカー協会会長)
あすから住生活グループ前会長 潮田健次郎氏

おわり